

## 1. 開催概要

日時：2026年4月16日（木）18時～19時30分

場所：上智大学13号館2階会議室

参加者：9名

話題：「学術論文執筆のプロセス—訪問介護員への量的調査に基づく研究—」

話題提供者：曾我晶子（57期生・日本ホームヘルパー協会東京都支部）

## 2. 報告内容の要約

### (1) 対象論文

発行年：2025年10月

題名：「高齢者施設へ情報提供する必要性の認識と行動に関連する要因—訪問介護員に対する量的調査より—」

掲載誌：『介護福祉学』第32巻第1号，pp29-45

### (2) 掲載までのプロセス

① 上智大学大学院の修士論文をもとに20,000文字に集約

② 1回目の投稿（2024年6月）→掲載不可

③ 2回目の投稿（2024年12月）→修正後に再査読

・テーマの集約化…問題の所在と分析結果の紐づけ

・分析視点の設定…訪問介護員が高齢者施設へ情報提供する必要性を認識していることを、訪問介護員に固有の「内発的動機づけ」ととらえ、それが実際の情報提供にどのように関連しているかを分析する。（内発的動機づけ…主に心理学で用いられる概念）

④ 論文の修正（2025年4月）

・再現性…誰が分析しても同じ結果が得られるように条件を明示する。

・透明性…目的設定から調査、分析、結果に至るまでのプロセスを明示する。

⑤ 論文の受理（2025年8月）

### (3) 研究の限界と課題

① 研究の限界…分析対象者、サンプル数、調査項目

② 研究の課題…情報提供した内容や具体的な方法の解明、訪問介護員の専門性の尺度開発

③ 訪問介護員へのインタビュー調査…次の論文を執筆、投稿中

### (4) 論文執筆後の感想

① 修士論文との違い…研究者としての立ち位置の明確化、いかに端的に書くか。

② 自身の研究の系譜化…自分の研究を先行研究として示すことで研究が系譜化される。

③ 論理一貫性の重視…多くの研究者の目に触れることの自覚を持つ。

## 3. 共有された意見・知見(抜粋)

参加者A：具体的な分析結果の内容を教えてくださいませんか？

曾我：高齢者施設へ情報提供する必要性の認識については、訪問介護員には情報把握の専門性があると強く感じている人ほど、有意な結果が出ました。また、訪問介護事業所に施設・居住系サービスが併設されている場合ほど、必要性を認識している人が多い結果となりました。

参加者A：それは納得の結果ですね。同じ建物にいれば情報提供したいと思いますよね。でも逆に言えば、他の訪問介護事業所を利用していた人は情報が届きにくいことになって、不公平ですよ。

参加者B：個人情報を提供する上で問題があるのでしょうか？

曾我：個人情報の第三者提供には利用者の同意が必要で、大抵の場合は他の介護サービス提供者に情報提供する必要性がある旨の同意書ももらっていると思います。

参加者A：情報提供といっても身体状況など客観的なものはまだ共有しやすいですが、利用者さんがどんな性格であったといった情報を提供するのは難しくもありますね。

曾我：そして、実際に情報提供した経験があるかについては、訪問介護事業所に施設・居住系サービスが併設されている場合と、地域間で情報共有するICTツールの活用と、訪問介護員が新

たな介護資源への創造的活動をしている場合に有意な結果となりました。

参加者 A：その ICT ツールは事業所で情報共有するのですか？

曾我：事業所内だけではなくて、他の事業所と情報共有できるものです。

参加者 B：地域で同じ ICT ツールを使うってことですか？

曾我：柏市や他の地域でも使われているそうです。医師会が主となって導入しているようです。

参加者 C：この研究内容を発表する機会は？

曾我：一昨年から介護福祉学会学術大会で発表を続けています。

参加者 A：Dさんは同じヘルパーとしてどうですか？

参加者 D：ヘルパーがケアマネに会うことはないし、自分たちの情報が伝わる実感はないですね。あと、利用者の家族としての経験では、在宅と施設のケアマネが違うのでその連携も難しいかなと思います。

曾我：ヘルパーさんの記録はサービス提供責任者（サ責）が丁寧に読んで、ケアマネや多職種に情報提供していますので、直接伝えていなくても貴重な内容です。

参加者 E：施設側からヘルパーに対して情報提供を求めることがありますか。

曾我：今回の調査で自由記述欄を設けたのですが、施設で働いて経験から入所時の情報が少ないと感じた人がいらっしまったので、どちらの経験も大事だと思います。

参加者 A：そう言えば、在宅と施設の両方を経験しないと勿体ないと言っていた人がいましたね。

参加者 F：今年の法改正でケアマネのシャドーワークを認める方法が示されているようなので、こういう情報提供もきちんと評価されるとよいですね。

曾我：そう思います。ヘルパーもボランティアのような支援をしている場合もあって、様々な支援の内容を明らかにしていきたいと思っています。訪問介護の研究は非常に少ないので、これからも地道に研究を続けて、情報発信していきたいと思っています。

#### 4. 課題の整理（※本項目は三浦個人の見解となります）

現在の課題：曾我さん自身が指摘している通り、現行制度上、訪問介護員が施設等に情報提供を行なったとしても介護報酬には反映されない、言い換えれば情報提供を行うことが有効だとしても、現実のサービス組織の中でそれを促進していくことは簡単でない状況にあると言えます。したがって、訪問介護員からの状況提供が、具体的にどのように介護サービス上の効果につながるのかについての実証研究が増えてくれば、制度上の評価が必要だという機運も高まり、制度の改革にもつながるのだと思います。研究デザインとしては難しいとは思いますが、そうした要素をなんらかの形で曾我さんが自身の研究に入れていくことが課題だと感じました。

今後への期待：学術的には大変地道な研究努力が必要なことは言うまでもありませんが、実際に介護サービスを利用する本人や家族、訪問介護員、施設職員等の当事者の立場から考えると、地域の集いとか今回のような「カフェ的な場」であっても、懸命に研究してきた人のお話を聞くことは、とてもインパクトがあり、聞く側の意識も変わります。その際、アカデミックというよりは、この場合はなるべく誰にでもわかる言葉で説明してくれるとありがたいです。そうしたきっかけから、利用者として訪問介護員に自分を理解してもらうことのメリットや、確かな情報把握にもとづいたサービスを評価していく姿勢が浸透していくことと思われます。是非とも機会があったら今回と同じ内容を、いろいろなところで紹介してほしいと思います。

以上